

パラグアイ共和国に派遣されて

— 現地教育事情と日本語教育 —

前アスンシオン日本人学校 教諭

北海道石狩市立花川小学校 教諭 永 洞 純 一

キーワード：パラグアイの概要，現地教育環境，アスンシオン日本人学校，日本語教育

1. パラグアイの概要

南米のほぼ中心に位置するパラグアイ。ブラジル、アルゼンチン、ボリビアの三国に挟まれた内陸国で日本のほぼ1.1倍程度の面積で、北海道の1.1倍程度の人口612万人（2007年 世銀）を有する。

気候は亜熱帯気候に属し、内陸性のため気温の日較差が激しい。首都アスンシオンの年間平均気温は約23度（沖縄が年平均22.5度）。6月～8月までが冬。それ以外は、ほとんど夏といっ
ていいぐらいに30度を超す気温が続く。

街には、一年中、花が咲き乱れ、桜の花に似たラパーチョの他、チバト（ホウオウボク）やブーゲンビリア、ハイビスカスなど熱帯性の花が咲きとても美しい。これらの樹木の「緑」、レンガ造りの家の「赤」、どこまでも続く空の「青」の三色は、パラグアイを象徴づける。

パラグアイの人々は、とてもおおらかで、知らない人同士でも「オラー（こんにちは）」と気軽にあいさつを交わす。また、子供をとっても可愛がり、陽気で親切でどこに行っても初めて出会っても声をかけてくれる。

パラグアイ伝統のお茶「テレレ」を楽しむ人々の姿、夕方になると広場でサッカーを楽しむ姿がどこにでも見られる。そこには、日本と異なるゆったりとした時間が流れ、のどかさや素朴さといった国民性を感じ取ることができる。

主産業は、農業、林業および牧畜。また、ブラジルとの国境沿いに発電量世界一のイタイプダムがある。ブラジル・アルゼンチンの国境沿いにあるイグアスの滝、南部にあるトリニダー遺跡は、世界自然遺産となっている。他にも、「ニヤンドゥティ」と呼ばれるレース編み、手工芸品の「銀細工」、刺繍の綿織物「アオボイ」、南米ハーブ「アルパ」もパラグアイを象徴するものである。



2. 現地の教育環境

パラグアイの義務教育は、就学前1年と小・中学校9年を含めての10年制。国の教育予算が低く、特に公立校の教育水準は、かなり低い。社会の進展に伴い国民一般の教育に対する意識は高まりつつあるが、現実には校舎や教員の不足などから十分な教育を行っていないのが現状である。

就学率も低く、就学前教育（5歳）66%、小学校90%、中学校53%、高等学校33%となっている。学校は、例年2月25日に新学期がスタートし、11月30日で終了。年間約200日（冬休み7/9～20）。授業は、三部制（午前・午後・夜間のいずれかを選択）で1日4～5時間、週20～25時間、年間約700時間。ただでさえ、少ない授業時間だが、さらに雨の日、学校行事、教員のストライキ、サッカーの国際試合などがある日は、授業を行わない。

教科については、日本と同じ教科の他、「コミュニケーション」「自然環境・保健」「芸術教育」などがある。教科書は、学校の図書室などに管理され、基本的に生徒が授業のたびに図書室から教科書を借りてくるシステムになっているが、ほとんど使われていないのが現状である。

したがって経済的に余裕のある家庭では、施設が整い、教育内容も充実している私立学校やアメリカンスクールに通わせている例が少なくない。また、現地人（特に、日系）の間では、日本の習慣や言葉に関心をもつ人も多く、日本語クラスのある現地学校に通わせる例もあり、「三育学院」、「日本・パラグアイ学院」、「NIHON GAKKO」と呼ばれる日本語授業をカリキュラムに取り入れた現地校もある。

現地に駐在する日本人の子どもは、日本人学校に通う場合がほとんどだが、中にはアメリカンスクールに通わせている例もある。やはり、海外にいる利点を生かし、英語を学ばせたい、または、親のどちらかが、日本人ではなく日本語で学ぶことが難しい等の理由からである。

日系人の子ども達は、現地パラグアイの学校（スペイン語）に通い、土・日曜日または、平日に各移住地にある日本語学校で日本語を学んでいる。

3. アスンシオン日本人学校の様子

アスンシオン市内にあり、敷地面積約1 ha。赤レンガ造りの校舎とよく整備された芝生のグラウンドがある。敷地内には、ハイビスカス、ブーゲンビリア、ラバーチョ、マンゴー、バナナ、パイナップル、ぶどう、コーヒーなどの熱帯性の植物が茂り、ハチドリやインコなどが飛んでくる自然豊かな環境に恵まれている。

創立27周年で小学部、中学部を擁し、児童生徒15名前後の超・小規模校であり、保護者は、開発途上国への援助・国際協力に関わる機関の職員、技術指導のために機関に派遣された専門家が多く、商社など民間関係は少ない。

学校の教育目標として「自ら学び 自ら考え 心豊かな たくましい児童生徒の育成」を掲げ、『自学・自主・自律』を目指す児童・生徒像とし、教育活動を展開している。

特色ある取り組みであるハチドリタイム（総合的な学習の時間）は、現地理解学習を土台とし、児童生徒の興味・関心（パラグアイおよび中南米）に基づいたフリーテーマ学習である。全教員が個別に支援・指導・評価を行い、2月にはハチドリ発表会を行う。

現地校との授業交流を行う「友情週間」は、日本の文化を大切にしたり、パラグアイについての理解を深めたりして、国際感覚豊かな心や幅広い視野を身につけ、現地校の子どもたちとの友情を深めるとともに、スペイン語を使ってコミュニケーションを図る役割を持つ。

放課後の時間7校時目は、自主学習時間（アスセナ）として、学力補充やサッカー教室、クラブ活動（ダンサ・パラグアージャ）の時間として活用している。

運動会では、現地の学校4校を招待し、すべての競技で交流し、行っている。これもまた現地の子供たちとの交流を深めるものとなっている。

11月から3月までは、全教員で指導する週2回4時間の全校水泳授業がある。日系の子供たちの通う現地日本語学校の児童・生徒も招待し、個々の泳力に応じ、指導を行う。全44時間で最後に練習の成果を発表する水泳発表会をする。まったく泳げなかった子でさえ、そのシーズンでクロール、背泳ぎ、平泳ぎ25 mを泳ぎ切り、発表会は、大変盛り上がる。2年目には、バタフライも含め、どの子も100 m～200 m個人メドレーに挑戦できる程になる。

月1回の児童・生徒が計画してのスペイン語朝会「ビバ・エル・エスパニョール」、スペイン語会話週1時間、英会話週2時間、現地理解学習（現地チーパ（キャッサバとトウモロコシの粉にチーズ等を混ぜて焼いたパン）工場・日系人経営の卵工場・再生紙工場・大使館・原住民マカ族の村等の見学）、そして2泊3日での全校移動教室などの取り組みにも特色がある。

この移動教室は、3年サイクルで訪問先を設定し、世界遺産であるイグアスの滝（ブラジル）、エンカルナシオン

(パラグアイ南部)、フィラデルフィア(パラグアイ北西部)を訪れる。それぞれの場所でのパラグアイの主産業であるお茶工場、乳製品工場の見学の他、現地の小・中学校や日系移住地、ドイツ系移住地を訪問し、交流会を行う。

2008年度からは、日系の子ども達を対象とした「日本語学習コース」を開講し、現地の子ども達も週一度、日本人学校に通い、日本人学校の子供達との交流の機会も広がっている。

その他にも、星空観察会、全校合唱、現地 JICA 青年海外協力隊員による出前授業の他、全校道徳の授業を通して、世界の人々の暮らしを疑似体験しながらワークショップを進め、「日本人」としての視線からだけでなく「途上国に住む人々」という視点からも物事を考える機会を持つことができた。

このようにパラグアイという地、恵まれた教育環境、少人数ゆえのアットホームな雰囲気の中で子ども達は大きく成長している。

4. パラグアイにおける日本語教育

戦前、戦後、海外移住が推進され、多くの人々が移民船に乗り込み、未知なる大地を目指した。アメリカ、ブラジルを始め、このパラグアイにも渡り、現在も7,700人ほどの日系人が存在する。「日系人」とは、日本以外の国に移住し当該国の国籍または永住権を取得した日本人、およびその子孫のことである。移住した世代は一世、その子どもは、二世、三世と呼ばれる。

パラグアイに住む日系人にとっての「日本」というイメージはどのようなモノか？さしずめ、パラグアイにおいては、日本による国際援助、工業製品、自動車産業の進出など日本の印象が、大変良い。そのため、パラグアイに住んでいながら、日系人は、自分たちを「日本人」であることに誇りが持てる。家庭では、パラグアイに住みながら「日本人としての誇りを持ち……」と、言われ育ち、一方で、学校生活の中では、「パラグアイ人」としての教育を受けてきている。そうしたジレンマの中で、日系人は、日本人として、または、パラグアイ人としてのアイデンティティーの確立に悩むことが少なくないという。

南北アメリカ全体が、多種多様な民族や文化で成り立ち、たとえ、日系人であっても日系のパラグアイ人とも言えるのである。だから、日系人は、パラグアイにおいては、「日本人」ではなく、「日本人を祖先に持つパラグアイ人」であり、「日本人でもあり、パラグアイ人」だとも言える。

そうした環境の中で、パラグアイの日本語教育は、東南アジア、オーストラリア、ヨーロッパ諸国の場合と異なる部分が多い。一般的には、日本の文化や言語に関心を持つ大人または、学生が学ぶことが多いが、これは、日本の経済成長が世界的にも認められ、世界各国で日本への興味・関心が高まったためだ。

しかし、パラグアイでの日本語教育は、「日系人」または、「日系の児童」に、単なる第二の言語としてではなく、「日本文化の継承のため」「人間形成のため」という目的の下に進められている。このようにして、パラグアイの日系人は、あくまで「日本人としての血」を次の世代へつなげて行くという目的が重要視され、「日系」とか「日本語」にこだわっていかなくてはいけない現状があるようだ。

5. おわりに

週末となると、学校 PTA 行事(餅つき大会・クリスマス会・歓迎会・送別会)の他、学校関係の子ども達の誕生日会、学校警察官とのサッカー、バレーボール試合、日本人会主催のソフトボール大会、バザー、盆踊り会、そして日系社会人OB野球などすべてのイベントに顔を出すのが通例だった。

日本でなら、仕事の一つとして参加しなくては、いけない……という状況もあるが、パラグアイでは、すべて誰もが家族同伴。どこでも親しい人たちに会えば、家族を紹介し合うのである。だから、家族も当然、その中にとけ込み、休日を楽しむことができる。

その他にも地域の人たちと同じ子供を持つ日系人と知り合う機会に恵まれ、日系人とのつながりが広がった。そ

のおかげもあり、そうした人達と食事をしたり、事あるごとにお祝いをし、さらにその移住地に出かけ、行く先々でも親切にされた。逆に、日系人にとっても、自分たちが、現地にとけ込んで、移住地へ行ってつながりを持つことは、非常にうれしいことだと感じてくれていたようだ。

何も知らない地へ行き、不安もあり、そして、何か困った時は、同僚そして同僚家族以外、頼れる人もなかなかないのだが、一歩踏み出し、現地の日系の人たちと家族ぐるみで親しく交流できたことは、自分たち家族の一生の宝となった。そして、何よりもそうした支えのおかげで、自分たち家族は、現地で長男の出産もでき、また、どんな苦しい時があっても、それを乗り越えられ、パラグアイでの楽しい思い出を胸に帰国することができた。

パラグアイでお世話になった同僚、同僚家族、現地採用の副校長、スペイン語教諭（日系2世）、用務員さん、その他の学校関係者、児童・生徒とその家族、パラグアイの人々、家庭教師のチリ人の先生、そして、お世話になったパラグアイの日系人のみなさんにこの3年間のすべてを感謝する。

